2013年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

注視点検出装置「GazeFinder」を用いた子どもの社会性の発達測定

■主任研究者　杉浦　康夫

■共同研究者　片山　泰一，土屋　賢治

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

発達障害（自閉症関連障害 2～3%、注意欠陥・多動性障害 3～5%、学習障害 3～5%）の徴候・症状は一見すると軽微であるが、社会性の発達を大幅に遅らせ、母子関係の構築、友人関係の構築、集団生活への適応、社会生活の適応に大きな障害をもたらす。このため、可及的早期に教育的・治療的介入を行うことが重要であるが、介入の根拠となる早期診断・早期発見の手法に平準化された・確立された手法は存在しない。発達障害の早期診断・早期発見の科学的根拠としての「注視点分布の異常」に注目すると、発達障害児は発達早期に定型発達児と全く異なる注視点分布のパターンを示す（例えば、目の前にいるひとの目を見ない）。したがって、このパターンを、技術的に信頼度の高い機器を用いて測定することによって、臨床診断を補助する、もしくは診断・発見の客観的根拠として使えるのではないかという仮定のもと本研究を始めた。対象は 0-6 歳の発達障害児もしくはその疑いのある小児（子どものケアセンターのプログラム「ぺんぎん」を利用する児）のうち、代諾者（おもに保護者）の同意の得られたものとする。

本研究は本学倫理審査委員会で承認（2014 年 1 月 20 日、91 号）され、2 度にわたり 10 名のこどもの検査が行われた。

今後引き続き、センターで指導される前、後の子供の検査を行い客観的資料の収集と、親御さんへの指導の援助を続けていく。